〈３〉書籍「大谷石　未来へ」の刊行
～大谷石の持つ限りなき潜在力～

ＮＰＯ法人　大谷石研究会　理事長　塩田　潔

１　はじめに

大谷石研究会が発足したのが平成13年，ＮＰＯの認定を取得したのが平成17年であり，発足時わずか40名であった会員が令和５年現在113名になった。本来なら昨年度に20周年記念事業として刊行する予定であったが，コロナ禍のなか１年延期になり，今回無事書籍「大谷石　未来へ」を出版することが出来た。

近年，大谷石も新たな使われ方が建築界でされ始めたり，大谷石文化が一般に認識されて来たなとの実感があった。と同時に宇都宮市において，大谷石文化が「日本遺産」に認定されたタイミングでもあった。それらを機に，「大谷石　未来へ」のテーマのもと，全編ストーリーを仕立て，それらに沿って建造物を厳選させていただいた。

２　新たな空間の演出

「江之浦測候所（平成29年）（写真１）」は，世界的現代美術作家の杉本博司氏が建築家榊田倫之氏（大谷石大使）と立ち上げた新素材研究所が設計し，小田原の海沿いの傾斜地に建つ美術館である。全長100mにも及ぶ南側に壁面が全部大谷石（内外壁共）であり，地球に負荷の少ない21世紀の素材として，やがて地球に還る素材として選んだそうだ。

実にシンプルな使い方であるが，それがかえって強烈なインパクトを与える。榊田氏は，「土と石の間のような存在」と表現しているように加工性の良さと感性に訴える魅力があるのではないだろうか。

写真１　小田原文化財団 江之浦測候所
筆者撮影

「ふふ　日光」は，日光の旧田母沢御用邸に隣接する景勝地であり，「界　鬼怒川」は，鬼怒川温泉地の雑木林のなか，それぞれに自然豊かな立地に建つ。地元の建築素材，地元の食材をふんだんに使用することが，宿泊客への「もてなしのコンセプト」としては同様であるが，大谷石の使い方が対照的で面白い。「ライトキューブ宇都宮」は，まさに「石の街・うつのみや」の玄関口に相応しく，大谷石を内外にふんだんに使われ，看板を背負った建築と言えよう。

３　時間を超えて輝き続ける

「自由学園南沢キャンパス（遠藤新設計）」は，現在「明日館」として親しまれている，池袋にある建物（F・L・ライト設計）が手狭になったため，現在地の東久留米市に移って90年近く経つ。創立者の羽仁もと子・吉一夫妻の教育理念が脈々と受け継がれている学園であり，建物の要所に使われている大谷石の風化の美しさが際立っている（写真２）。

「鎌倉文華館鶴岡ミュージアム（昭和29年）」は，神奈川県立近代美術館としてとして戦後いち早く建設された公立の美術館であり，ル・コルビジェのもとで学んだ建築家坂倉準三の傑作

である。

写真２　自由学園南沢キャンパス
「大谷石 未来へ」から

鶴岡八幡宮の敷地内であったため，近代美術館が葉山町に移転し，返還された時点で存亡の危機に立たされたが，保存を訴える建築学会等の声が届き，文化交流館として継承され，国の重要文化財にもなった。「葉山　加地邸（遠藤新設計）（昭和３年）」　も同様に，解体の危機にあったが，保存や継承を望む人たちの努力で，女性の篤志家が受け継ぎ，文化財として最小限の改装にとどめ，宿泊施設やドラマの撮影等で注目を集めている。それぞれに危機を乗り越え，見事に継承された好事例と言える。

「日光金谷ホテル」は，外国人向けに「金谷カッティージ・イン」としてスタートしているが，現在地に移ってからも名門として今も輝き続けている。大谷石は，メインの入口の列柱に大々的に使用されているが，内部の階段やバー等の要所に，F・L・ライト風のデザインが見られる。これは，箱根の富士屋ホテルに婿養子に入った山口正造氏（当時の金谷ホテル社長金谷眞一氏の弟）が，一時帝国ホテルの臨時の支配人をしていたことがあった故，金谷ホテルとは交流があり，地下１階の増築改修工事の際，帝国ホテル・ライト館風のデザインを踏襲している。

４　日本の建築の近代化を支えた大谷石

言うまでもなく，F・L・ライトによる「旧帝国ホテル・ライト館（大正12年）（写真３）」に使用されたことにより，大谷石は一躍近代建築の素材として名声を上げた。ライト設計による「自由学園　明日館（大正10年）」，同じく「旧山邑邸（現・ヨドコウ迎賓館）（大正13年）」，また「自由学園」等，次々と建築界を賑わした。そのような中でも，帝国ホテル以前に教会建築に大谷石が使われていたことは，特質すべき事であり，しかも積石造（組積造）である。

「安藤記念教会（大正６年）」，「安中教会（大正８年）」共に教会建築としては，秀逸であろう。

写真３　旧帝国ホテル・ライト館
「大谷石 未来へ」から

５　日本の産業の近代化を支えた大谷石

真岡市の「久保記念観光交流館（明治～大正時代）」は，日本銀行宇都宮支店真岡出張所として，地元の産業（真岡木綿や農業の振興）を支え，鉄路によって，下館市（現筑西市）から，東京方面に「特岡」と呼ばれ，特別な真岡木綿という上質なブランド品の産出に寄与してきた。また，下館市は，真岡木綿の物流の拠点として，木綿問屋も真岡より多く，単なる問屋だけでなく，足袋底の生産量も多く，「中村美術サロン（明治期）」も

木綿問屋として，東京の三越に直接卸していたこともあり，足袋底の製造に勤しみ，足袋の街行田市に卸していた。それらを保管していた蔵は，火災を避けるべく重厚な大谷石造りであり，防火扉も見事なものである。「足袋の街」として繁栄し，江戸期から明治，大正，昭和初期まで全国シェアの８割という生産量を誇った行田市の足袋蔵は土蔵造りであるが，基礎石はほとんどが大谷石であり，足袋製造の作業場の腰回りも大谷石を積み，昭和期に入って大谷石の足袋蔵も出現した。

また，両毛地区（足利，桐生，伊勢崎等）において，日本の富国産業であった養蚕，絹織物産業は，日本の生糸の輸出のかなりの比率を誇った。今も多く残っており，芸術工房，博物館，飲食店，和菓子店，美容室，スポーツジム等に再利用されている大谷石の鋸屋根の工場は，かつての繁栄が偲ばれる。特に，桐生市の飯塚織物の工場であった「桐生自動車博物館（昭和前期）（写真４）」は，格別の美しさを誇る。

写真４　桐生自動車博物館
「大谷石 未来へ」から

埼玉県小川町に最近（令和４年）再生活用された「コワーキングロビーNESTo（大正14年）」は，かつてたばこ倉庫であった石蔵を国や県の助成金を使い，見事にシェアオフィス，カフェ，イベントホールとして蘇らせた。小川町は，「和紙の街」として名を馳せているが，最近は池袋から特急で１時間という地の利もある事から，都心からの移住者が多く，また二重生活者も多くいる事から，程良い里山生活も体験でき，石蔵での「仕事時間」や週末のコンサート等「交流時間」が特に新鮮なようである。

鹿沼市にある「帝国繊維鹿沼工場（明治22年）」は，深岩石であるが，地元産の大麻を使って消防用のホース等で生産量を誇っていた大規模の工場であり，今も生産拠点の一角を担い現役の施設である。今では素材が化学繊維になったが消防用ホースは，日本一の生産量を維持している。また，日本の近代化は鉄道の発達により，物流，人流が活発になり，明治初頭より，大正，昭和と急速に発展を遂げた。駅舎や関連付属施設，プラットホーム等に大々的に大谷石は使用されてきた。今でもＪＲや東武鉄道の主要な駅のプラットホームの基壇に大谷石が散見される。「東急線田園調布旧駅舎（大正12年）」は，１度解体されたものを平成になって住民の要望があり，会社もそれを鑑み復元されたものである。

「東武東上線ときわ台駅舎（昭和10年）」，「東武宇都宮線南宇都宮駅舎（昭和７年）」共に東武鉄道の尽力により，最近創建当初の姿に改装され，大谷石の外装がひときわ目を惹いている。それぞれに駅前の住宅地の開発が田園調布に倣い，エトワール型（放射状）の街路構成になっており，「板橋の田園調布」，「宇都宮の田園調布」等と呼ばれており，何とも微笑ましい。

６　地元の産業・生活・文化としての大谷石

「カトリック松が峰教会（昭和７年）」は，ネオロマネスク様式で街中にあり，ネオゴシック様式の「日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会（昭和８年）（写真５）」と並び，「石の街・うつのみ

や」のシンボリックな両雄である。どちらも鉄筋コンクリート造の張石であるが，西欧の教会建築に勝るとも劣らない堂々たる石造建築である。

写真５　日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会
「大谷石 未来へ」から

「屏風岩の石蔵（西蔵・東蔵）（明治41年，45年）」は，まさに大谷町の玄関口のランドマーク的な威風堂々たる石蔵であり，和風な東蔵に対し，洋風な西蔵と対照的な造りが興味深い。これだけ精巧かつ重厚な石蔵は他に類を見ない。

大谷町から，西へ２㎞程の所に膨大な屋敷を構える「小野口家の石造建築群」は大小６件の国登録有形文化財を持つ名家である。板橋石（日光市板橋地区産出）の長屋門をはじめ，大谷石や田下石の蔵等の中で，江戸末期に建てられた「前の蔵」は注目すべき様式である。かつては石屋根であったものを現在瓦屋根にしているが，コーナーの積み石，軒蛇腹は大谷石，その他は田下石張りで，外観はまさに積み石造であるが実は厚さ３寸（９cm）ほどの張り石造である。この様な様式が幕末から明治，大正期の市内外に多く見られ，張り石蔵から積み石蔵への過渡期の様式として興味深く，今後の学術的な研究に委ねたい。

「渡辺家　石蔵・薬医門」に見られる，屋敷林，茅葺の母屋，薬医門，両側の石蔵，石塀等の配置は，栃木県内や宇都宮市内の旧家の典型的な屋敷構えであり，残したい原風景である。

「大谷資料館」の採掘場跡の地下空間は，全国に類を見ない大規模の施設であり，宇都宮市を代表する観光スポットである。大空間の特徴を活かした諸々のイベントも行われているが，独特の音響効果のあるあそこならではの「音空間」を持ち合わせている。

「大久保石材店石室」は，岩山を刳り抜いて母屋へのアプローチを作った時，さらに内部を刳り抜いて作った極めて貴重な遺構である。

「旧篠原家住宅」は，市内で唯一の国の重要文化財であり，その石蔵３棟は，土蔵造りに大谷石を張ったものである。郊外の農村地帯では，板倉（郷倉）に直接石をタテ張りにした張り石蔵として発展したが，旧篠原家の蔵は土蔵造りからの進化であり，防火的要素のみでなく，ステイタス的な意味合いもあったと考えられる。

「旧大谷公会堂（昭和４年）（図１）」は，現在，大谷の市営駐車場の一角に移築復元工事が始まっている。たまたま筆者の会社が，「（仮称）大谷観光周遊拠点施設新築工事監理業務」の委託を受け，参画することになった。令和５年秋には竣工し，文化活動や観光の拠点として大谷町の振興に寄与する日が待ち遠しい。

図１　旧大谷公会堂 移築復元完成予想図
「大谷石 未来へ」から

「二荒山神社石垣（弘化３年）」は，現存する大谷石の建造物の中では最古のものと思われる。

神社所有の明治時代の絵図に，壮大な石垣が２段に及び描かれている。

今は木々が生い茂っているが，通りから見上げた石垣の景観はさぞかし見事であったであろう。

７　地元独特の景観形成

「徳次郎町西根地区」は，徳次郎石を産出する地域にあって，早くから生活の中に浸透していた。また，旧上河内町，旧河内町地区に街道沿いには石蔵，石塀が集積している集落が多く，「上田町（うわだちょう）集落」，や「芦沼町集落」はそれぞれに独特の景観を形成している。「岩渕家長屋門」は，白沢街道（旧奥州街道）沿いにある石蔵等が連なる一角に，大谷石の腰壁，漆喰壁がひときわ輝いており往時を偲ばれる。

「大塚家長屋門（写真６）」は，砂田街道沿いにあり，重厚な積み石造りの長屋門である。明治中期の銅版画による鳥観図が見つかり，当時の生活風景が描かれており貴重な資料である。

写真６　大塚家長屋門
「大谷石 未来へ」から

また，栃木県の景観を形成する土木遺産としては，「篠井町逆川に架かるタイコ橋」は，100年を超える風雪に耐え，田園風景の美しさを保っている。

「東武宇都宮駅の東側擁壁」は，100mを超え連綿と続く。90年余に渡り東武宇都宮駅の人流を地道に支え，今も現役を続けている。

８　石蔵の再生活用

「創作和食　石の蔵」は，平成13年に和食レストランをオープンさせ，続いて個室，ギャラリーショップ，さらに２階にコーヒーラウンジを整備し，宇都宮の民間の迎賓館的な役目を果たしている。定期的に開催するジャズやクラシックのコンサートも人気を博している。

「吉田村VILLAGE（写真７）」は，かつて農協（ＪＡ）倉庫だったものをホテル+ショップにコンバージョン（用途変更）した画期的なプロジェクトである。県内，市内には，相当数の大谷石の倉庫（米等の貯蔵用）が今は役目を終えて眠っている。この吉田村VILLAGEが契機になり，ＪＡが動き出そうとしている。これは，ＪＡのみならず宇都宮の，栃木県の「隠れた宝物」であろう。

写真７　吉田村 VILLAGE
「大谷石 未来へ」から

栃木市駅前の（株）乙女屋が営む「蔵の菓　栃木本店」，宇都宮市松が峰教会前の「ダイニング蔵　おしゃらく」，同じく駅近くの「Café SAVOIA s ―21」等は，小さな石蔵を店舗やカフェ・レストランにコンバージョンした好例である。それぞれに街中に根付いて市民や県内外の客に親

しまれている。

「惣誉酒造　石蔵迎賓館」，「宇都宮酒造　南蔵」の四季桜試飲室は，酒造りの醸造や貯蔵に欠かせない石蔵をコンバージョンし，日本酒の愛好者や外国人客に好評を得ている。それぞれ栃木県を代表する「惣誉」，「四季桜」の銘柄である。「お休み処　坂長」は，古河市内の旧商家を物産店やお休み処に，石蔵をイベントホールにしたもので，鉄骨の臥梁＋水平ブレースを入れ，耐震補強をした好事例と言える。

「陶庫」は，元々肥料店であった店舗，米蔵や肥料蔵を益子焼の販売店とギャラリーにしたもので，石蔵のコンバージョン例としては，30年余が経ち，おそらく最古のものであろう。益子町の城内坂の西入口に位置し，人気店の１つである。

９　広がる大谷石文化

「横浜クライストチャーチ（横浜山手聖公会）」は，横浜市の山手の丘の上にあり，高級住宅地のなかの大谷石の教会はひと際輝いている。

「日本基督教会甘楽教会」は，富岡製糸場の裏側に立地し，戦後建築された教会としては珍しく積み石造である。ゴシック様式を取り入れ，非常にオーソドックスなスタイルであるが，蚕糸業に携わっていた信者が多く，製糸場で働く女工たちも足繁く通ったものと見られる。「篆刻美術館（旧平野家）」の表蔵（３階建）は，付属のレンガ造とのコラボレーションとして貴重なものであるが，この凝灰岩がどこの産出かが謎である。

「築地本願寺石塀」は，南北約150mという極めて長い石塀であり，角柱と楕円形の横財の組み合わせという大変手の込んだもので，本堂同様伊東忠太の設計であり，国の重要文化財になっている。

「栃木信用金庫さくら通り支店」は，近年の金融機関では初めて大谷石を大々的に内外装に使ったものとして評価が高い。建物全体のみならず，バス停のあるポケットパークを設け，地域に開かれた金融機関というイメージアップにつながった。「真岡信用組合荒町支店」も，大谷石を使ったものとして高いデザイン性を持つものであり，理事長宅の敷地内にあった石蔵の妻面を内部の待合ホールに再現し，その余った石材を前庭のポケットパークのベンチに再利用し，市民に開放している。

「悠久の丘（写真８）」は，宇都宮市の火葬場で，緑豊かな森の中に建っている施設であり，ＰＦＩによって運営されている。建物正面のアプローチに沿って設けられたグリット状の大谷石の壁面は見事な色合いを成し，最後の別れに相応しい雰囲気を醸し出している。

写真８　悠久の丘
「大谷石 未来へ」から

「矢中の杜」は，つくば市の歴史的街並みの北条地区の通りから少し入り込んだ傾斜地に建つ。防水剤の「マノール」の開発者である実業家矢中龍次郎の実験住宅で，木造和風住宅でありながら陸屋根であり，自らの防水剤を試している。現在は，ＮＰＯ法人“矢中の杜　守り人”が管理運営を担って，この文化遺産を守っているのが心強い。

「トラットリア・アグレステ」は，社会福祉法人が運営しており，知的障害のある人たちが，調理からフロアの接待業務までを行い，トレーニングに励んでいる施設である。大胆に木造小屋組みや大梁を見せる構造と大谷石の壁面のコラボレ

ーションが何ともいい雰囲気を醸し出している。「ワグナー・ナンドールアートギャラリー」は，益子町のメイン通りの東端の曲がり角から緩やかな小径を登って行くと，竹の植え込みのある五角堂（ギャラリー），さらに行くとアートギャラリーの入口へ続く。中に入るとテラスのあるアトリエ棟，図書館棟，そして少し下ると茶室棟，さらに東に行くと様々な彫刻が並ぶ細長い展示棟（２階建）に続く。さらに折り返して見事に手入れされた中庭を進むとその南側に哲学の庭，四阿家，その東側に事務所・住居棟へと続く。平和を願って創られた哲学の庭の彫刻は，ナンドール氏の傑作であり，同じものが氏の母国であるハンガリーのブタペストの公園内に再現されている。見事な建物群の配置と庭園の全貌は，写真集にあるようにドローンによる鳥瞰画像でなければ見ることが出来ない。

１０　過去，現在，そして未来へ

書籍「大谷石　未来へ」の「過去，現在，そして未来へ」のコーナーでは，８名の研究会会員及び２名の会員外の方々に，現在関わっている，または関わってきた大谷石文化の側面を熱く語ってもらった。それぞれに「大谷石愛」を感じられる文面である。

今回の，書籍「大谷石　未来へ」を制作するにあたって，著名な建築物や著名な建築家の名を借りる事によって，大谷石の付加価値がさらに高まってくれるのではなかろうかと言う疚しい考えがあって進めて来たが，編集作業を続けていく中で，否そうではなく，大谷石の持つ潜在的なポテンシャルが逆に建築物や建築家の名を高めているのではないかと思い始めて来た。それは，Ｆ・Ｌ・ライトや遠藤新，近年では榊田倫之氏等優れた建築家によって，大谷石の持つ潜在的な力が引き出され，かつ建築物や建築家の名声をも高めたと言って良いのではないだろうか。また，掲載させていただいた所有者の方々が，とにかく皆々協力的であった事，「大谷石愛」に溢れていた事は何よりうれしい事であった。「大谷石」というキーワードで，非常にフランクに掲載に同意いただき，逆に感謝までされ驚いた。

全部で，3,000部制作しすでに2,000部を販売し，残りが少しずつ書店に並んでいる。

今回の書籍「大谷石　未来へ」の出版により，「大谷石文化」が市内，県内はもとより，全国に発信され，「宇都宮の大谷石文化」の文化度が高まる事，「石の里・大谷の産業及び観光」に輝く未来がある事，「大谷石関連の次世代を継いでくれる若者達」に光がさす事，さらには「全国の石文化を有する地域」の今後の指針になっていただければうれしい限りである。